

道東の遠軽町丸瀬布地区（旧丸瀬布町）には、今でも煙を上げて元気に走る森林鉄道の蒸気機関車が保存されています。その名は「雨宮21号」。国内で唯一の動態保存された森林鉄道用の蒸気機関車で、1928（昭和3）年に国内初の蒸気機関車として製造された重量10tの可愛らしい機関車です（写真1）。町内の旧北見営林局丸瀬布営林署管内国有林には、1927（昭和2）年から建設が開始され、最盛期には総延長71・4kmにまで及んだ武利意・上丸瀬布森林鉄道がありました。そこで活躍していたのが「雨宮21号」で、この地で活躍していた蒸気機関車3台のうちの1台です。なお、この雨宮21号はすでに北海道遺産、近代化産業遺産、準鉄道記念物に認定されていますが、林業発展史の上からの重要性も認められ、今回、森林鉄道遺構群とともに林業遺産に認定されたのです。

1963（昭和38）年に森林鉄道が廃止になった後、蒸気機関車たちを待ち構えていたのはスクラップになる運命でした。しかし、蒸気機関車を愛する地元有志の手によって、「雨宮21号」は解体を免れたのです。全国的な森林鉄道の廃止にともない、森林鉄道車両の多くは全国的にもほとんど残っていません。そのような中において、地元有志たちは雨宮21号を解体の危機から救い、さらに修繕が行われ1979（昭



写真1 森の中を颯爽と走る雨宮21号（写真提供 遠軽町）



日本森林学会による

# 日本の林業遺産を知ろう！

第9回 「雨宮21号」と武利意・上丸瀬布森林鉄道遺構群

国立研究開発法人 森林総合研究所 やまき かずしげ  
八巻 一成

和54)年に動態復活を果たしたのです。現在は旧武利意森林鉄道の軌道敷を一部利用した、丸瀬布森林公園内こいの森内に敷設された線路上を定期的に運行しており、薪を燃やして実際に走行する姿は、森林鉄道全盛時の蒸気機関車の姿を今だにとどめる国内唯一の例として、極めて価値が高いと言えます(写真2)。週末や夏休みになると、その姿を一目見ようと全国から多くの人が訪れます。

一方、森林鉄道関連遺構については、町内のボランティア団体によって調査が進められ、橋脚や路盤などの遺構の存在が確認されています。この森林鉄道軌道跡を利用して、それらをめぐるツアーも開催されています。また、森林公園内の郷土林業館にはかつて使用された林業関連の道具などが展示されており、地域の林業発展の歴史が総合的に体験できるようになっています。丸瀬布では雨宮21号を町の中心的なシンボルとして、森林鉄道を軸とした林業の歴史を生かした地域づくりを進めています。

このように、住民ばかりではなく全国の多くの人々から愛されている雨宮21号ですが、2016年8月に北海道に上陸した3度の台風は430ミリという記録的な降水量を記録し、その結果、森林公園上流部の堤防は決壊、線路も含めて公園内の施設は甚大な被害

を受けました(写真3)。しかし、「雨宮21号」にかける関係者の思いは熱く、幸い「雨宮21号」をはじめとする車両には被害がなかったことから、復旧へ向けて人々はすぐさま活動を開始しました。軌道の早期復旧を目指すため町では直営の作業部隊を編成し、復旧のための測量、軌道の取り外し、軌道路体部分の修復など積雪期前に可能な限りの作業を実施しました(写真4)。

そして、線路の早期復旧のための工事に取っかかり、2017年の春には何とか一部復旧にまでこぎ着けたのです。町役場産業課主幹、兼、雨宮21号機関士の小山信芳さんは、「今回の災害によって、町民はもとより、全国各地からも早期復旧を望む声や激励・お見舞いのメール等が町に多数寄せられました。このことで、国内で展開された森林鉄道の歴史を語る上での雨宮21号

の動態保存の意義、重要性を再認識しました」。町役場後輩の機関士、上戸智仁さんとともに、雨宮21号にかける思いをさらに熱くしたところです。2017年、まだ春浅い道東のゴールデンウィーク。雨宮21号の復活を喜ぶ大勢のファンの賑やかな歓声とともに、雨宮21号の汽笛が丸瀬布の森の中にこだましたのでした(写真5)。



写真3 台風被害による線路の惨状(写真提供 遠軽町)



写真4 線路復旧の様子(写真提供 遠軽町)



写真2 ボイラーに燃料の薪を投入し発車準備



写真5 森の中にはいつも汽笛と人々の歓声がこだましています(写真提供 遠軽町)